

27-621-5

幼児体育教室の保護者のクレーム行動に関する研究
—大阪Nスポーツ教室の事例—

○中村勝也¹, 富山浩三² (¹大阪体育大学大学院, ²大阪体育大学)

幼児体育教室を運営するにあたって, 大阪Nスポーツ教室の保護者の態度に関する事例をもとに, 保護者の問題行動を分類し, それらの対応を検討することを目的とした。

研究方法としてはNスポーツ教室の指導スタッフを対象に「保護者の対応で困ったこと」について調査を行い, 記述式データを収集し, KJ法にて分類し, 検討を加えた。

分析の結果, 保護者のクレームを伴った問題行動には, 利己的・おまかせ放任・不満足・非常識といった4つのケースに分類され, その発生はスクールのタイプによって異なった。それはレッスンに対するお金の掛け方や期待の大きさに影響していると考えられる。今後はこうした結果を加味し, 保護者の教育観の改善と保護者からのニーズに応え得る, 幼児体育教室のサービスと指導力の向上, さらに子どもの人間性を高めることのできる環境づくりを構築することが当該分野の発展のためには必要であると考えられる。

キーワード: 幼児体育, 保護者, クレーム行動

27-621-6

業間中休みに行う短時間コーディネーションプログラムの影響 —低学年児童の敏捷性と保健室利用状況—

○安光達雄¹, 野川春夫² (¹PCY, Ltd., ²順天堂大学)

本研究では, 業間中休みに行う短時間コーディネーションプログラムが低学年児童の敏捷性と保健室利用状況にどのように影響するかを検証した。

東京都N区の保健室利用が著しく多い小学校2年生, 介入群26名, 非介入群20名の46名を対象とし, 1週あたり平均2回5週間で計10回のプログラムを実施した。業間中休みの20分間を利用して, 1回当りの指導時間は10分間前後のプログラムを行った。プログラムの前後に両群とも敏捷性テストとして反復横とびを行った。また, プログラム前及び開始後に担任教諭及び養護教諭より, 児童の保健室利用状況を把握した。介入群と非介入群のプログラム前後に計測した反復横とび得点とプログラム前及び開始後の保健室利用延べ回数からそれぞれ二要因分散分析及びBonferroni法で多重比較を行った。

プログラム前の反復横とび得点では, 両群に有意な差は認められなかったが, プログラム後は有意な交互作用が認められた ($F(1, 44) = 5.48, p < .05$)。また, プログラム前とプログラム開始後の保健室利用延べ回数を二要因分散分析した結果, 有意な交互作用 ($F(1, 4) = 11.29, p < .05$) が認められた。

キーワード: 低学年児童, 敏捷性, 保健室利用

27-622-1

貯筋運動教室による運動パフォーマンスの変化

○栗田侑季¹, 川西正志², 武岡佑磨³, 北村尚浩² (¹鹿屋体育大学大学院生, ²鹿屋体育大学, ³鹿屋体育大学プロジェクト研究員)

【目的】貯筋運動教室における参加者の性別・年齢別, ベースライン (以下, BL) 別にみた運動パフォーマンス (以下, EP) の変化特性を明らかにすることを目的とする。【方法】対象者は2009年から2011年の間に貯筋研究プロジェクトに参加した4地域185名の中高年者で, 地域ごと週1回, 90分の貯筋運動教室に10週間参加させ, 貯筋運動や, EP (椅子座り立ち, 5メートル最大速度歩行, 上体起こし) の測定を行った。加えて, 自宅でも毎日貯筋運動を行うよう求め, 実施量を所定の用紙に記入するように指示した。【結果】教室実施前後の記録変化を性, 年齢, BL別に比較したところ, 有意差は, 性では認められず, 年齢では若干認められた。しかし, BL別では全ての種目において低レベルのグループが中, 高レベルのグループと比べて有意に向上していた。さらに, 男性は運動実施期間の後半において椅子座り立ちの記録変化と運動実施量に相関が認められた ($r = -.44, p < .01$)。【結論】EP記録の変化はベースラインが高い者に比べて低い者の方が大きく, また, 椅子座り立ちにおいて, 男性は運動実施期間の後半で運動記録の変化と運動実施量に相関があることが分かった。

キーワード: 運動パフォーマンス, 貯筋運動, 中高年者

27-622-2

ウォーキングの継続率向上に関する研究

—美しい歩き方に着目して—

○谷津祥一¹, 野川春夫², 鈴木規美子³ (¹順天堂大学大学院生, 国際ノルディックウォーキング連盟公認ナショナルコーチ, ²順天堂大学大学院, ³ポスチュアウォーキング協会)

手軽に始められ, 身体活動・運動の健康へ効果が出やすい効果・効率的で目標設定がしやすく継続率の向上が図れる「美しい歩き方」に着目し, 事例を検証することを目的とした。参考文献などを用い, 「美しい歩き方」に着目し, ニュースポーツと呼ばれる, ノルディックウォーキングとポスチュアウォーキングに特化して質問紙調査を実施し, 一般に行われているウォーキングとの比較を試みた。質問紙調査, 感想文, 記述内容などから, 意識を変え, 日常生活の中に導入し, 青少年から成人まで幅広くその効果を得ることができるとの結果を得た。さらに, ウォーキングに「美しさ」を取り入れることによって, ここ数年その実施人口が増えているジョギングのように, 女性を中心とした愛好者の増加が図れ, 減少している40代女性の運動参加率・ウォーキングの継続率が向上し心身の健康にも貢献できると結論付けた。

キーワード: ノルディックウォーキング, ポスチュアウォーキング